2022年4月10日 川越教会

丸山　勉

与え尽くした人（2）

［マルコによる福音書15章25～41節]

イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。こうして、「その人は犯罪人の一人に数えられた」という聖書の言葉が実現した。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

[１]　「受難週」を迎えて

今年も「受難週」を迎えました。私たちはこう思ってしまうことがあると思います。特に既に教会生活が長い方、私もそうなのですが、「あぁ一年が巡ってくるのは早いなあ。来週はもうイースターか。そんな季節なのだなぁ」と。…けれどもちょっと待てよ、と私は今回思いました。教会歴としては毎年巡ってくることなのですけれども、単に「歳時記」のようにとらえてしまっているとしたら、何か大事なものを見失ってしまうことにならないだろうかと。当然ですが、聖書の今日の受難の記事は「その時一回」だけの出来事だったのです。「来週はイースターだ。どんなお祝いを準備しようか」などというのは全くなかったのです。

先週と今週でマルコ福音書の15章を読んでいますが、先週は20節迄をご一緒に見ました。ローマの総督ピラトが政治的判断から、最終的にユダヤ人の当時の宗教指導者たちに、イエス様のことを委ねてしまいました。ユダヤ人の指導者たちは民衆に「バラバの方を釈放せよ」と言わせ、バラバは恩赦を受け、イエス様は当時の犯罪人の極刑である十字架刑を受けることが定まってしまいました。そうすると後は、ピラトは、当時のしきたりに従うようにしてイエスを鞭打ちにし、そしてローマの兵士たちはこの弱ったイエスをさんざん弄んだ訳です。それはまだ朝早い時間の出来事でした。

［2］ 「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

そして今日の21節以下ですが、その傷だらけ、血だらけになったイエスは、自らがかかる十字架の木を、ここではイエス様が背負って行ったというよりも通りがかりのキレネ人シモンに負わせ、ゴルゴタの丘まで運ばせました（21-22節）。その後、ついに主イエス・キリストの体、地に這いつくばっていた体は皆の目にハッキリと掲げられるようになります。丘の上の、しかも十字架の木に、まるでモノのように釘付けされて、見世物となりました。その十字架のふもとでは兵士たちが、戦利品のごとくイエス様の服を分け合っていたと記されています。―「イエスを十字架につけたのは朝の九時であった」と書いてあります。あのペトロの裏切りと同時刻に鶏が鳴いたあの早朝からまだそんな時が経っていないのです。ちなみに、今日の箇所でイエス様の弟子たちは誰一人登場していません。皆イエスの傍にいることが出来なかったのです。弱いと言えば弱い。しかし、他の民衆も傍観的になるだけで、誰一人イエスを引き下ろそうとする人はいませんでした。ここに支配していた空気は「諦めの空気」「無力さの空気」ではないでしょうか。人間というものの無力さ、弱さというもの（それは私たち自身のことでもありますが）を見ない訳にはいきません。

　そして、ここでは沈黙ではなく、むしろ罵りの声が、十字架上のイエスに向かって浴びせられます。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ」とか「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」―ここに描かれているのは、人間の持っている「救い主像」「ヒーロー像」とは似ても似つかない、ボロボロになってしまっている哀れな男の姿、敗北者の姿です。誰もこの人をメシア・救い主として受け入れることなど出来ない、そういうお姿です。

そしてこの方は、十字架にかけられながら体力を消耗し、昼の12時を過ぎ、そして午後3時になった時、ついに大声で叫ばれたとあります。―「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」 この言葉はとても重要な言葉だと思いますが、この後、ある人がイエス様に痛みを麻痺させるためでしょうか、酸い葡萄酒を葦の棒につけ口に運ぼうとしますが、主イエスは再び大声を出されてついに息を引き取られます。息を引き取るとは、一つの人生の終焉です。まだ30数才でありました。病死でも事故死でもありません。なぶり殺し殺しにされたのです。それが金曜日です。今週の金曜日です。けれどもさかのぼって今日の日曜日は、イエス様が人々の喜びの声を受けながら都エルサレムに入っていった日曜日とされています。つまり、たった数日・5日間で全く状況が一変してしまった。

　今私は「たった数日で全く状況が一変した」と申しました。今の私たちの世界もそうなのではないかと思います。急速に世界が二分化しつつある恐ろしさを感じます。ウクライナへの侵略は酷くなる一方で、正直言ってニュースを見ることも聞くことも嫌になることがあります。あまりにも悲惨で、残虐で。そうすると私の心の中に起こってくる感情があるのです。あの大国の独裁者は消えてしまえばよい、早く裁いて欲しいと。そこには人間の正義感があると言えるのかも知れない。でも、待てよと思います。これが「二分化」です。裁くことは気持ちが良いのです。イエス様の十字架の場面もそうです。それは人間を「ハイ」の状態に持って行ってしまう。犯罪人は、敵は、消え失せろ。これは正に戦争の論理ではないかと思います。集団高揚状態に宣伝・プロパガンダが働き、戦いが正当化され、一気に人は盲目にされます。これはサタンの思うつぼではないかと思いました。

その中で主は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と。…これほど絶望的な言葉はないではありませんか。これは詩編22編の冒頭の言葉をイエス様が言われたのだというようにも言われますが、しかし主はこれを大声で言われたのです。ボソッと呟いたのではなくて、叫ばれたのです。…もし今の世界、理不尽を抱えて死んでいく人々が、神様に文句を言いながら死んでいくという状況があるとして、しかしもう既に主イエスはその方に身を寄せるようにして「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と祈って下さっているのだと、そう受け止めることも許されるのではないでしょうか。これは、人間に対する神の祈りだと思うのです。ここまでご自分を与え尽くされたのだと思います。

［3］ 「本当にこの人は神の子だった」

つい最近の文化的なニュースですが、逢坂冬馬（あいさかとうま）さんという方が書いた小説『同志少女よ、敵を撃て！』 が、今年の本屋大賞に選ばれ、私はその受賞スピーチの動画を見たのですが、それに大変教えられました。これは、1940年年代のナチスドイツと当時のソ連が戦った戦争（独ソ戦）で、女性狙撃隊に加わった、まだ少女の物語なのですが、逢坂さん（36才）は、現在のリアルな現状と物語がリンクしてしまっていることに戸惑いを隠さず、受賞については感謝しながらも、全く笑顔を見せず、このようなことを語られていました。

―この戦争を機にロシア国営放送を辞したアガラコワ氏は、我々の放送の中に「ロシア」はなくなってしまったと言う。そう言えるのだろう。しかし我々はどうだろう。ロシアと言うと映像は最高権力者達の顔をすぐに映し出す。あれがロシアの表象なのか。それよりも例えば、戦争という絶対悪を止めよと訴えた文学者、またロシアのウクライナ大使館に戦争やめてと花束を持って行き、逮捕された小学生、そして戦争に反対する運動に加わったことによって、拘束された15,000人以上のロシアの人々や、戦争反対の署名に自らの名を書き連ねた100万人以上のロシアの人たちをロシアという国名を聞くたびに考えた。戦争というものは簡単に始められるということが今回も実証されてしまいました。しかし私は悲しみはしても絶望はしないで行きます。平和構築の努力をします。小説を書く上でも、それ以外の場面でも、変わりはありません―と。

私たちは、他者を「敵」にしてはいけないのです。時代の空気のせいにしてもいけない。「ロシア」という敵はいません。敵と決めるのは‟私の心”です。イエスを殺したのは私の心、あなたの心です。サタンはとても巧みです。権力を通し、敵愾心を煽ります。ですからあの十字架のキリストから目を離さないようにしたいと思います。このお方は何者なのか、と。私たちはこの十字架の場面にいないのでしょうか？ピラトの中に、群衆の中に、逃げた弟子たちの中に、遠くから見ることしか出来ない者たちの中にいるのではないか。でも、主は、その私たちのために十字架でご自身を与え尽くして下さったのです。愛ゆえに！私たちは神様に祈る中で、振り回されないで自立していきたいと思います。私は39節にある異邦人の百人隊長の告白は、神様が与えて下さる、人生の大事な時に力となる告白なのだと思います。―「本当にこの人は神の子であった」。 お祈り致します。

　主よ、どうかこの受難週、あなたの姿を心の中に映し、またあなたの声を心に響かせながら歩むことが出来ますように。あなたの敵であった私たちをあなたはただ一方的な赦しと憐みによって受け入れ、生涯あなたを追うとお約束下さいました。感謝を致します。どうか、サタンのいざないに惑わされる弱い私たちですから「あなたこそ神の子です」との告白を常に新しく与えて下さいますように。ウクライナへの戦争が終結するよう、主が助けて下さい！私たちもあなたの御心を信じ、祈り続けます。救い主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。